

南アフリカ土産「マンデリンCD」

牧野久美子

一九八〇年代の英米音楽シーンの一つの特徴は、チャリティものやエイドものがやたらと流行ったことだ。その代表格はともにアフリカ難民救済のための「ドウ・ゼイ・ノウ・イツ・クリスマス」と「ウィ・アー・ザ・ワールド」であるが、難民とともに当時の社会派ミュージシャンが競って取り上げたのが南アフリカのアルバートヘイトだった。

ネルソン・マンデラは当時生きながらすでに伝説と化しており、多くの唄に歌われ、一九八八年には獄中で七〇歳の誕生日を迎えた彼のためにロンドンのウエンブリーでコンサートが開かれた。また、黒人意識運動を描いたリチャード・アッテンボロー監督の『遠い夜明け』が制作されたのが八七年、その主題歌となった「ビコ」はピーター・ゲイブリエルのステージではラストの曲と決まっていた、聴衆は曲にあわせて拳を突き上げ、南アフリカの抵抗運動との連帯を示すのが恒例となっていた。

そんなものにどっぷり浸かって十代を過ごして、大学に入る頃には南アフリカは特別の思い入れのある国になっていたのだが、昨年初めて現地を訪れる機会を得て、実際に行ってみると違和感を禁じ得なかつた。見知らぬものに出会ったことよりもむしろ、

予期していたものに出会わなかつたショックだ。

滞在中、ジョハネスバーク郊外のオレンジファーム地区で、「アレコパネング」というNGOの活動を見学することができた。「アレコパネング」はソト語で「皆でまとまろう」という意味だそうだ。中心的なプロジェクトは、コミュニティの女性たちが共同作業で自分の住む家を建てることである。一軒建つたら、次にグループ内のほかの人の家をつくる。作業のあいだ子どもを預けることができ、子どもたちは一緒に遊び、勉強し、おやつを食べる。成人用の教育（識字）プロジェクトも併設されていて、銀行などで実際に使われている用紙を使って、どう記入すればいいのか具体的に教える。

ここに見られるのは、生活に必要なもの、役立つものを追求するプラグマティックな態度だ。そのために食欲にドナーを探そう。リーダーの女性によれば、「資金を出してくれるところであればどこでもいい。私たちは現実的になった」。それを聞いてガツンとやられたように感じたのは、私が知らず知らず抵抗運動のイメージをコミュニティ・プロジェクトに投影していたからだろう。日本から南アフリカまでの十数時間の

フライトは、私の頭のなかの南アフリカから現実の今の南アフリカまでの十数年のラゲを一気に飛ばす、タイムトラベルでもあった。私は初めて訪れた地ですでに浦島太郎状態だったのだ。

南アフリカを離れる直前、CDショップに寄った。笑顔のマンデラの写真と新しい南ア国旗がジャケットに配された、「ネルソン・マンデラへのトリビュート」なるCDが置いてあって、「あやしい……」という周りの声を振り切って、記念にと買って帰った。

帰国後さっそく聴いてみると、それが南ア国内ではついでに出会わなかつた、私にとって妙に馴染みのあるものであることに気がついた。収録曲はどれもここ二、三年に録音されたものらしいのだが、どういふわけだか「八〇年代ポップ」の音がする。国外でつくられてきた南アフリカ像をなぞつたような、わかりやすく単純でチープな音。行く前に私が抱いていた勝手な南アフリカのイメージは、外国人向けの「お土産」のそれだったのである。

アレコパネングはそんなものとは違う南アフリカの一端を見せ、私に自戒を迫つたのだ。

(まさきの くみこ)／総合研究部